「今日は霧が濃くなるな」この町で生まれ育ったらしい同僚がつぶやいた。仕事に関係する場以外では無口な男のめずらしいつぶやきは、やけに耳によく残った。つぶやきを聞いたのは、快晴の空が広がっていた昼休憩の時だった。何言ってるんだ、このぼんくらは、と思った。

夕方、そのつぶやき通りになった町を見て、感心した。同僚は生まれ育ったこの町のことをたしかによく知っているようだ。一年もこの町にも住んでいれば分かるようになるのだろうか。この町で初めての冬を過ごす私にとっては何もかもが新鮮だ。

最後に職場を出た。自分以外の不在を確認し、電気を消し、鍵を閉めた。自転車を押して霧の中を進んだ。漕いで帰るという選択肢をとおくに蹴飛ばしてしまうほどに深い霧だった。段々と濃くなっていく影の中を行きながらハッキリと思う。漕ぐのではなく押す判断をしたのは間違いではなかった。ただ、そもそも霧の中を進んででも帰ろうとするのが間違いだったと気付いたのは、自分がどこを歩いているのか全く分からなくなったときだった。会社を出てから三十分は経っていた。普通であれば徒歩でも家に着いている時間だった。

濃い霧のせいで二メートル先からほとんどまともに見れなかった。私はこの町のことを良く調べないままここに来てしまったことを僅かばかり後悔し始めていた。ただ、それとおなじくらいに期待を高めている。私は、まったく知らない町に来ているのだ。

霧に明かりの色が移っている。この町の街灯の色は薄い橙色で、それは歩道に点々と立っているので車道を歩いてしまう心配はなかった。それでも町のどこを歩いているのか分からなければ意味がないのだが。

出歩いている人はおそらくいなかった。おそらくというのは霧のせいで見えないからなのと、光で伸びる影がひとつもないからだ。自分の影が伸びているのを見るに、人がいれば動く影があるはずだった。それからさらに十分もした頃には、私はもうあきらめていた。諦めて、なんとか探り当てたベンチに座っている。早朝のランニングのおかげだった。

事態は良くなっておらず、時間が経過するほどに悪い方へと近づいていった。霧の濃さは一向に変わらず、人にも会えない。物理的な孤独は慣れたものだったが、何を観測することも叶わない孤独は初めてで、おそろしかった。世の中には未だ知らない孤独があったのか、と。

私は、希望が芽生えるのはいつだってそんな時だと忘れかけていた。

カランコロン、と鈴の音がすぐ近くで聞こえた。音のした方を自然と見る。

「おや、今日の霧は一段とだね」

「そうですね、なのでお気をつけて」

「なに、壁伝いに歩けばすぐだ」

「知ってます。でも、いちおう」

「はは、ありがとう」

「はい」

「うん、じゃあまた」

紳士と若い女の会話だった。紳士の影が先の方へ歩いて行く。若い女が扉を閉めようとするのも影の動きでわかった。

「や、そこな女性」

「え？」

「すまない、霧でまったくわからないのだが、そこは店なのか」

「……えっと」

「霧が濃くなって帰れなくなってしまったんだ、店に入れてくれないだろうか」

「…いいですよ。その予定だったので大丈夫ですよ」

「ありがとう。ちなみに、店はこのベンチからどれくらいの場所にあるんだ？」

「斜めに十二歩くらいです」

たしかに十二歩だった。

店内は薄暗く、短い通路の先にカウンターがある空間が広がっていた。最低限の灯りで照らされたそこは、心細さとは無縁の場所だった。安心して自然と息を吐いた。

コートをかけ、カウンターの真ん中の席に座った。鞄は足元に置いた。そして他の客はいなかった。霧で見えなかった女性は想像よりも若く見えた。

「どこから来たの？」

にもかかわらず、十以上は年上に見えるはずの私への語りかけは、まるで下級生に話しかける上級生のようだった。

「職場から」

「そうじゃないよー、どこから引っ越してきたの？」

「どこだろうね」

「……飲み物どうする？　なんでもあるよ」

「なんでも？」

「なんでも」

「では厚岸を」

「厚岸の、ナニ？」

私は意地悪で言ったつもりだった。彼女はくるりと棚の方に身を向け、ずらりと並んだボトルの中を漁り始めた。すぐ手前にはないようで、手前に置かれているボトルをカウンター上に置いていった。

「……小寒を」

「いいよね。小寒のピート感」

彼女は言いながら、たしかに厚岸の小寒を取り出した。カウンター上のボトルは横にどけ、取り出したそれを私の前に置いた。

「飲み方は？」

「ロックで」
「いいね、やっぱりウイスキーはそうじゃないと」
彼女はその準備を始めた。
「この店は……バー？」
「うーん、まあそうだね」
「はっきりしないね」
「昼間は食堂。たまな夜はイタリアンとかフレンチとか、あと一回だけだけど鮨やったよ」
「おもしろい店だね」
言ったところで、ウイスキーが出される。
「ハイ、どうぞ」
「ありがとう」
彼女の目は口以上に雄弁だった。私はつい口もとを綻ばせた。
「お嬢さんも何か飲もう」
「やったっ！　ありがとう、じゃあ同じやつ頂こうかな」
ショットグラスを準備するのを見て、私は噴いた。
「どうしたの？」
「いや、ショットで飲むの？」
「グラスはそうだけど、ちゃんと味わって飲むよ？　大丈夫」
「……なら大丈夫か」
「いまおいしいチーズがあってね、きっと合うと思うんだ！」
「おいしいチーズ？」
「安心して、ちゃんとお客さんの分も……お名前をお伺いしても？」
「ヤマダ」
「あはっ、――偽名だね」
言われた瞬間にありありと動揺が顔に出たのは、彼女がにっこりと笑ったのを見て分かった。
「ま、いいよ。ヤマダさんね」
間違いなく、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
チーズは切り分けられたものがすぐに冷蔵庫から出された。
「じゃ、乾杯」
「うん、乾杯」
私は自然とグラスを彼女のものより下げていた。彼女はにっこりと口端を上げていた。いやにかわいらしかった。彼女そのものが、底なしの穴のように思えた。
ひとかけらのチーズをつまみ、食む。ウイスキーを飲み、余韻のあるうちにまた食む。
……たしかによく合った。彼女を見ると、でしょ、と目が語っていた。